

図書館だより

都城工業
高等専門学校
図書館

No. 72

FEBRUARY 2013



ソラクサン
「韓国 雪嶽山」

特集

**校内読書感想文・読書体験記コンクール
入賞者発表**

図書館だより CONTENTS FEBRUARY 2013 No.72

「古典を読むということ」 図書館長：望月高明……………1

「図書館あれこれ」 建築学科：樋口栄作……………3

特集 校内読書感想文・読書体験記コンクール 入賞者発表

校内読書感想文・読書体験記コンクール入賞作品 ……………4

講演「太陽光や太陽熱を利用する新エネルギー研究最前線」 ……15

講師 宮崎大学工学部准教授：西岡賢祐氏

JDream II 講習会開催される ……………16

講師 JST（独立行政法人科学技術機構）

イノベーション推進本部情報提供部福岡デスク のぎ田めぐみ氏

今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長 機械工学科 5年 浅野 大樹

副委員長 物質工学科 4年 宮川 麻有……………17

ブックハンティング実施される ……………17

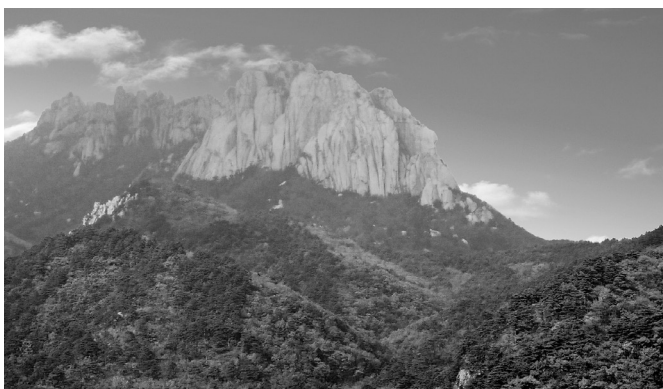
〈ブックハンティング〉で購入した図書

図書館からのお知らせ ……………18

図書館開館予定

学年末・春季休業期間中の長期貸出について

編集後記



●表紙「韓国 ソラクサン 雪嶽山」

韓国の北東部・江原道に大きく広がる山域が雪嶽山である。朝鮮半島東部を貫く太白山脈に位置する雪嶽山は、大青峰（標高1,708 m・韓国第三の高峰）を主峰とする山だ。

早くから降り積もった雪が長く残っていて、岩石が雪のように白いため「雪岳」と呼ばれている。花崗岩でできた岩肌は、奇岩奇峰を形成し、切り立った峰が連なり大自然の雄大な姿を見せてくれる。

高山植物が咲く春、緑陰の夏、鮮やかな紅葉の秋、銀世界の冬と、四季折々の変化をみせる山岳美とともに、人の手が入らないまま保たれた悠久不変の自然がそこにはあり、「雪嶽山国立公園」に指定されている。

撮影 図書館長（一般科目）望月 高明

古典を読むということ

図書館長 望月高明

小文の表題を「古典を読むということ」としたが、私が古典について深い造詣を持っているとか、あるいは古典について何か一家言を持っているとかいうことではない。もしそういうことであれば、私などは一言半句もものを言うことはできない。ただ仕事柄、平生古典に接する機会が多いので、些か古典について考えていることを述べてみようとするにすぎない。

近ごろ、世は『論語』ブームであるらしい。事実、宮崎市内の大型書店などに行ってみると、書棚に『論語』に関する書籍が幾冊も並んでいる。地域がらか『論語』の本格的な研究書で、通読するだけでもかなりの時日を要するような浩瀚な書物は余り見かけない。そのほとんどはハンディーなもので、啓蒙を目的としたものか、あるいは『論語』中の金言を解説した処世訓的なものである。『論語』に関する書籍だけでなく、年少者を対象にした「論語塾」なども各地で開講されていて、盛況を博しているらしい。

『論語』とは固より春秋時代の儒家の祖孔子（前552～479）及びその高弟たちの言行録。もちろん原文は古代中国語で書かれていて、それを読みこなすためには専門的な訓練を必要とする。専門に古代中国語を研究しない限り、その内容を理解しようとしても全く歯が立たない。

それでは、なぜ今『論語』ブームなのだろうか。なぜ今から実に2500年前の春秋時代の混乱期を生きた異国の人間が、わが国の人々に歓迎されているのだろうか。昨今の「論語ブーム」の背景には、その要因を探っていくと一義的でない、様々な要素に突き当たるであろう。ところで、中国の歴史を通じて『論語』ほど広く人々に読まれた書物は他に見当たらない。このことはわが国においても事情は変わらない。『論語』は遥か応神天皇（270～310）の時代に最初の漢籍として舶載されたというが、爾来日本人に最も親しまれてきた書物が同書であった。殊に孔子を開祖とする儒教の近世的自覚の表現である朱子学が正統的地位を占めた江戸時代においては、一層そうであった。しかし、最も根本的なのは現代の社会が政治的にも、経済的にも、また思想的にも、あらゆる領域において価値観が動揺を来し、何らの頼る術もない不安動揺の中に投げ出されているという直観が働いているのではないだろうか。かかる精神状況に直面している人々が、ハウツーもの、浮薄なものではなく、一層原理的なもの、堅固

なものを求めて捜し当てたのが、極めて断片的な形で一言片句を記憶に留めていた『論語』ではなかったか。私は昨今の「論語ブーム」の背景には、例えばディレクターがただ興の赴くに任せて、次から次へと関心を払っていく場合のように、のっぺらぼうのように延べていくのとは根本的に異なる精神的状況が横たわっていると思う。

ただ問題なのは、『論語』が果たして「苦しい時の神頼み」ではないが、苦境に陥ったからといって、われわれが手軽に利用できる様なものであるかということだ。私はこのことを考える時、いつも倉石武四郎博士の次の言葉を思い出す。

先師狩野君山先生が逝去される20日ほど前、わたくしがたまたま枕頭に侍ったとき、「この年になってもまだ『論語』が満足に読めない」と嘆息された。先生ほどの高齢、先生ほどの博学で、先生ほど努力されて、しかも『論語』が満足に読めないとおっしゃる（以下は省略）。

狩野君山先生とは、京都大学第1代の教授で、同大学の中国学の基礎を確立した狩野直喜博士のこと。現在は「碩学」とう言葉も恰も豆殻のように内実を失ってしまって、それに相応しい人物を容易に見出し難い乏しき時代であるが、狩野博士にしても倉石博士にしても、文字通り「碩学」という言葉がぴったりする。ともあれ、上の狩野博士晩年の言葉は『論語』を読むこと、理解することがいかに容易でないかということ語っていて余蘊がない。そして、このことは何も『論語』に止どまるものではない。総じて古典というのはそういうものである。古典というのは、例えばそれを料理で譬えていうと、われわれが煮て食おうと、焼いて食おうと、炒めて食おうと、その他どのように調理しようとしても、処理しきれない何かが後に残る。また、われわれがそれを横にしようが、縦にしようが、あるいは逆さにしようがいかにもし難いもの、それが古典である。そして、その余剰が現在に至るまで古典を生かしてきた生命力。思えば、私のようなちっぽけな人間にその秘義が理解できるような代物であったならば、とっくの昔に滅びてしまったに違いない。もっとも、このように言ったからといって、私は古典の“分からない”ということ、理解不可能性それ自体をありがたがっているのでは固よりない。

私は宋明の儒学思想（その結晶がすなわち朱子学と

陽明学)を研究しているが、漢語文献には意味が分かったくらいでは、どうしようもないところがある。もっとも、このように言ったからといって、文意を正確に把握することが大事でないと言っているのではない。むしろ、外国語で書かれた文献が押し並べてそうであるように、漢語文献においても、この正確に文章の意味を把握するということが実に容易ではない。私はこれまで長い年月漢語文献を読んできたが、どんなに片々たる文であっても、クリアーに理解できたという実感をついぞ持ったことがない。しかし、些か強弁するようであるが、漢語文献には確かに文意が少しばかり把握できたからといって、それだけではいかんともしがたいことも紛れもない事実である。いわば古典の文章を正確に把握することは出発点であって、そのことが直ちに古典を理解することではない。

このことを例えば「芸道」について考えてみよう。茶道でも華道でも、また舞踊でも弓道でも、その他何であっても、芸道というのは(師匠が)教えるべきことはすべて教え、(また生徒は)学ぶべきことはすべて学び取っても、それだけでは画竜点睛を欠くというか、それから先は生徒自身が身をもって何ものかを体得しなければ、一步も前に進めないというところが存しているように思う。それがどんなに難透であったとしても、その一関を通過しなければ真にその芸に参じたことにはならない。そういうところが厳然として存在している。そして、その領域に立ち入ることが許されるのは、長年月の厳しい修行に耐え抜いた少数の者に限られる。芸道の世界において、「稽古」とか「精進」ということがやかましく言われ、そのことが相応のリアリティを帯びて現に行じられているのは、理由がないことではない。そして、そういう修行を欠いては、その者は門外漢として閉め出されるのは当然である。

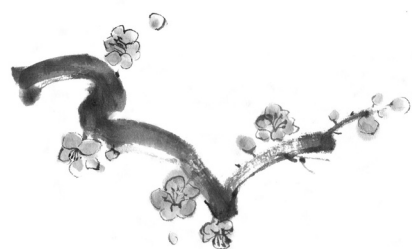
以上、芸道について些か言及したが、その世界では厳しくその“資格”の有無が問題になる。恐らくその“資格”のない者の作品・発表などは何の値打ちもないものとして見向きもされないのであろう。一方、古典の世界では固よりそういう“資格”は問題にならない。いわば古典の世界は「大道無門」である。古典という大道には定まった門戸がない。どこから入ろうと、またどこから出ようと勝手次第である。なぜなら至るところ入口であり、至るところ出口であるから。

上來、古典について2つの特色を指摘した。すなわち、その1はいかなる手段を用いてアプローチを試みても、われわれの手には負えない余剰が残るという古典の理解不可能性。そして、他の1つは古典にはいかなる資格も要せず、決まった門戸もないという「大道無門」性。古典におけるこの2つの特色は、それぞれ

ベクトルを異にした相反したものに見えるけれど、果たしてそうであろうか。むしろ、古典はこの2つの特色のあるがゆえに、一方では古色蒼然たるもの、時代がかったものとして人々の激しい反感を買いもし、また一方では、常に原点を指し示すものとしてわれわれの立ち位置を問い、かくも激しく人々を惹きつけ、魅了して已まないのではないだろうか。

それでは、古典にわれわれはどのように接したらよいのだろうか。小文の劈頭で述べたように、私は古典について造詣など何もないから、このような大きな問題に対して有効な処方箋など示すことなどできない。ただ、われわれが古典に対するとき、前者の特色が忘れられるか、全く顧みられないような場合、古典がわれわれの自由に処理し、手軽に利用できるものとする錯角が支配するであろう。一方、後者の性格が忘れられるか、顧みられないような場合、古典などはどうせわれわれの手に負えない代物なのだから、それを学んだところで何の意味も価値もないとする、古典蔑視の趨勢が助長されることが避けられない。

再び『論語』についていうと、昨今の『論語』ブームには、それがわれわれの処理可能な手軽に利用できるとする錯覚が支配していないだろうか。私のような浅学菲才には何一つとして断定的なことなど言うことはできないけれど、古典(ここでは勝義には『論語』のこと)というのはわれわれが手軽に利用できるものではないということだけは、きっぱりと断言することができる。それはむしろ、われわれのそういう皮相で安直な態度を批判し、断固として否を突きつけるものである。古典とはそういうものであると私は思う。孔子の思想を理解しようとする場合、『論語』が依然としてそのための有力な文献であることは疑えない。しかし、孔子の思想の単なる忠実な再現ということは不可能である。それは必然的に自分の思想による『論語』の解釈にならざるを得ない。そして、その解釈が何より自分にとって信の置くに足るものであるためには、常に自己の行住む坐臥に即するものとして『論語』を読み来たり読み去らねばならぬ。古典がわれわれに何ものかを開示するとしたら、そういう時であらう。何事もそうであるが、容易なことなど何もないのだ。



図書館あれこれ

建築学科 樋口 栄作

図書館長を1期でやめた理由

平成11年に図書館長になり、1期2年でやめました。その理由は、図書の帯出冊数を下げた責任です。年間帯出（館外借出）冊数は、図書館がよく利用されているかどうかの1つの重要なバロメータであり、その当時は、教官会議に報告され、教員の注目するところでありました。西山図書館長の時に、最高2万冊（全国高専最高記録）を記録し、その後、次の館長で大幅に下がり、私で1万冊を割ってしまいました。

一体、何冊がいいのか、試算しました。学生一人がひと月に1冊借り出すことが望ましいとすれば、年間1人12冊となります。教科の勉強が忙しいので、年間12冊読んでくれればいいのではという考えです。すると、学生数850名とすれば1万200冊になり1万冊が基準となるでしょう。この数値以上だと利用が活発であり、以下だと低迷と判断しました。この1万冊を割りましたので、責任を感じ、続投を断りました。

なお、帯出冊数が2万冊であれば素晴らしいと言えば、そうではありません。1万5千冊を超えると、図書係は、のべつ窓口での貸出に当たらなければならず、他の業務ができないことが経験で分かっています。なにごととも程々があります。

図書館だよりの表紙を飾る写真とは

現在、立派な写真が、「図書館だよりの表紙を飾っています。ほとんど、図書館長自ら海外出張の時撮った写真と思います。図書館長自らの写真を掲載するようになったのは、私の時からです。私は建築が専門ですから、自分で撮った魅力的な建築の写真を提供しました。国内版では沖縄の、海外版ではイタリアのものでした。次の崎山先生も頑張られて、研修先のヨーロッパの街や建築の写真を載せられました。現在の望月先生は、韓国版が多いようですね。ご専門が中国哲学—儒学、韓国儒学ですから、韓国に出張されることが多いのでしょう。つまり、表紙写真は、歴代館長の守備範囲と写真の腕前を示すものです。今後、どんな館長がどんな写真を提供されるのか楽しみです。

図書の用途構成について

本校の図書館の図書部分は、閉架書庫+図書事務室+開架書庫室（約4万冊収蔵可能）+閲覧コーナー（大きなテーブルと文庫本があるところ）+第1閲覧室+第2閲覧室の用途構成になっています。第2閲覧室は、もとはLL室でした。1階の広々としたラウンジを潰して（残念!）、そこにLL教室を移動新設したために生み出された閲覧室です。閲覧室が2つになった利益は、単に、広くなって収容力が増えたことにあるのではなく、それぞ

れの性格付けと使い分けが可能になったということにあります。閲覧室は、特に学校のそれは、図書閲覧とともに学習室の性格をもっています。第1、第2とも学習+閲覧の用途です。学生の閲覧及び学習行為の形態と目的は多様です。学習だけみても、個人利用かグループ利用か、閲覧（図書利用）を伴う学習か学習のみか、短時間か長時間か、それらの組み合わせと中間的なものを含めると実に多様です。これら多様な行為を1つの空間で受け止めると、利用者間で軋轢干渉が生じます。不便とか落ち着かないとかいった不満が出てきます。そこで、空間の分化と性格付けが必要になります。

「第1閲覧は、参考図書の頻繁な利用による調べ学習、グループ学習及び開架書架と緊密な試し読み閲覧の空間、第2閲覧は、参考図書をあまり必要としない個人学習及び借出した本の本格読みの空間」といった性格付けイメージで整備されて来たと思います。その性格付けは正しいと思いますが、その方向での改善が未だ不徹底と思います。

図書館の外観色彩について

本校図書館の外壁（柱を除く）の色彩は、グレイッシュパープル（灰色がかった紫色）です。外壁改修前は、やや褐色気味のだいたい色でした。改修前の色彩は、稲穂を前景にして遠望した時には良かったのですが、近寄ると、ややギラギラした印象でした。現在の色は、望月館長の時、決定されたもので、私も教務主事として決定に参加しました。色の決定は大変難しいのですが、グレイッシュパープルは、群馬県立女子大の成功例もあり、暖かく優しい色ですので、賛成しました。目立たず平凡との評がありますが、それがいいのでは。

私の好きな図書コーナー

まず、大型本の美術全集、日本の国宝等がある東のコーナーです。私にとって、図書館は「美術館」です。よく利用しました。市、県の図書館に負けません。閲覧台がなかったのが、大型本は閲覧し難かったのですが、最近改善され、その場で楽に閲覧できます。少しずつ良くなっていますね。

つぎに、北側の哲学書コーナーです。和辻哲郎全集があります。難しい本が並んでいます。学生はほとんど借りていないようです。

最後は、南西の、小林秀雄全集とか日本古典文学大系があるコーナーです。趣味として、古代和歌—特に新古今、古典文学を読んでおり、古典（古文）を、解説や現代訳を見ることなくスラスラ読める（内容の理解は70%程度）ようになりたいと思っています。しかし、人生は短く、道遠しです。

特集 校内読書感想文・読書体験記コンクール入賞者発表

校内読書感想文コンクール入賞者（入選）

『もの食う人びと』を読んで……………	機械工学科	第1学年	上村 隆也
『老人と海』を読んで……………	電気情報工学科	第1学年	今村 達哉
『ノルウェイの森』を読んで……………	物質工学科	第1学年	大浦 久美
『苦海浄土 わが水俣病』を読んで……………	物質工学科	第1学年	水間 峻介
生と死～『ノルウェイの森』を読んで……………	建築学科	第1学年	向江 明希
『こころ』を読んで……………	機械工学科	第2学年	瀬之口亮太
『変身』を読んで……………	電気情報工学科	第2学年	釘崎 凌
『人間失格』を読んで……………	物質工学科	第2学年	尾曲 華綺
『人間失格』を読んで……………	建築学科	第2学年	高橋 弘臣
『小さき者へ』を読んで……………	物質工学科	第3学年	松川慶太郎

校内読書感想文コンクール入賞作品

『もの食う人びと』を読んで

1年 機械工学科 上村 隆也

人は今、何をどう食べているのか、どれほど食えないのか。辺見庸の「もの食う人々」を読み私は衝撃を受け、食事とはなんだろう、私たちの食生活がどれほど幸せなのかということ深く考えることができた。

人々はいま、どこで、なにを、どんな顔をして食っているのか。あるいは、どれほど食えないのか。ひもじさをどうしのぎ、耐えて忌むのだろうか。日々ものを食べるという当たり前を、果たして人はどう認識しているのか、いないのか。食べる営みをめぐり、世界にどんな変化が兆しているのか。うちつづく地域紛争は、食べるという行為をどう押しつぶしているか、それらに触れるために作者は旅に出た。

彼は最初にバングラデシュの首都ダッカを訪れた。そこでは駅前広場の屋台の直径70センチほどのブリキの大皿に骨付きの鶏肉がたくさん載っていた。彼は、お米を一口、二口食べて次に骨付き肉を口に運ぼうとした。すると突然「ストップ」という叫びがとんだ。「それは、食べ残し、残食なんだよ。」と言われた。ダッカには金持ちが残した食事の市場、残食市場がある

のだ。

残食市場、このようなものがあること自体に私は衝撃を受け、私たちが普段当たり前のように食べ物を残している愚かさに気づき、もっと食事というものについて深く考え、一回一回の食事に感謝しなければいけないと思った。

次に「人魚を食う」という言葉にいてもたってもいられずに彼はマニラに向かった。人魚と言ってもその伝説になったジュゴンのことであるが、その地域ではジュゴンを食べるといのである。

ジュゴンはとても美味といわれ、肋骨を粉にして飲めば精が付き産後の肥立ちの悪いのに効くし食べれない所はないといわれていた。

しかし、ジュゴンは保護動物であり、捕獲することはおろか、食べるなどもってのほかであり、れっきとした犯罪なのである。

人々は罪を犯してまで食を求める。日本でもこれに似た例がある。「鯨を食べる」ということだ。これは日本国内では犯罪とされていないが、外国からの鯨を

保護する団体が日本の捕鯨を妨げ問題になっている。この問題はこれから先ずっと続き、国の交友関係にも大きくつながってくると思う。

彼は、ずっと気になっていた1つの謎をなんとか解くため、アフリカから厳寒のロシアに飛んだ。

彼は、1993年のはじめにロシア太平洋艦隊で不思議な事件が起きていたことを日本の雑誌で知った。艦隊訓練基地で新兵数十人が栄養失調で入院し、うちの4人が死亡したという。「原因」としては、報道は、艦隊の財政悪化、食糧横流しの可能性をほのめかしていた。それに彼は、疑問を抱いた。核を有し、バルシャ湾哨戒にも参加している大艦隊が、いささかの食糧不足ならいざ知らず、新兵が死ぬほどの栄養失調がなぜ起きるのか。「財政悪化、食糧横流し」にしても「死」の説明になりはしない。

肉の缶詰の横流し、肉なし生活。それで兵士が栄養失調になった。と言う者や、軍隊内のいじめが原因と言う者がいたが、どれもよく分からなかった。ある黒い制服の兵士の話によると4人は軍事生活が辛くて病除隊になろうと、せっけんを食べた。それで死んだ。その兵士は上官からそう聞いた。また4人はすでに病気だったと聞き、ますます状況がつかめなくなってしまった。

この事件の真相は、将校らが肉の缶詰など食品の組

織的横流しをしたために軍の食卓の中身が悪化した。上級兵士たちが我先に栄養価の高いものをむさぼり、新兵は飢え、栄養失調で死亡するものが続出したのだ。

このように上司と部下、その上下関係により、部下の食生活が制限され、結果的に部下の死につながってしまったのだ。上司が与えられた食事だけを食べて、部下の食事に手を出さなかったら部下は死なずに済んだのだ。すべては、上司の食に対する「欲」から始まったのだ。

このことを考えると食に対する人間の貪欲さ、「食欲」という欲の恐ろしさを改めて知ることができた。

ここまで3つの食に関する問題について考えたが、1つ目は、貧富の差による食の違い、2つ目は犯罪を犯してまでも食を求めるといふこと。3つ目は、上司と部下の上下関係による食の制限、どれも「ものを食べる」ということから始まっているのだ。どのようにも食すかで人間の価値が大きく変わる。

辺見庸の「もの食う人々」を読んで私はものを食べるという私たちにとって当たり前の行為で人の価値が変わり、人の生死に大きく関係し、国の問題へとつながることが分かった。私は好き嫌いが多く、好き嫌いをなくし、これからの食生活をしっかりと見直していきたい。

『老人と海』を読んで

1年 電気情報工学科 今村達哉

この作品は、キューバの年老いたサンチャゴという漁師による「カジキマグロとの戦い」と「帰港時の鮫との戦い」を通して、自然の厳しさや人間の力を描いた作品である。1匹も獲れない不漁の日が84日も続き、サンチャゴを尊敬して手伝ってくれていた少年からも見放される。その後、生涯最大の獲物との死闘の末ついに仕留めるが、帰る途中に鮫に襲われ持って帰ることができなかった。

主人公は老人である。この作品はノーベル賞作家のヘミングウェイの最期の作品だと知り、人間の老いについて書かれた作品なのだと理解した。その老人が死闘の中、少年の助けがあったらなとふと思った言葉に、僕は心を打たれた。老人は老いたがゆえに様々な智慧を持っており、なによりも今までの豊富な経験がある。そんな老人が言った言葉だからこそ重みを感じた。今までにない最大の獲物を、老人を尊敬する少年に見せたいと思う気持ちからきたのだろう。

サンチャゴは漁に出て魚を捕まえ、それを持ち帰る

ことを目的に闘っていたはずだ。カジキマグロとの闘いでは勝ったかのようにみえたが、鮫との闘いに敗れ、カジキマグロは骨だけになってしまう。これは果たして勝利といえるのだろうか。老漁師サンチャゴは負けたのだろうか。負けたとすればいったい何に負けたのだろうか。持ち帰れたことにおいては、勝利と言えなくはない。しかし、漁師として売れる価値のなくなった魚を持ち帰った事は、敗北である。鮫に負けたのだろうか、それとも「漁」そのものに負けたのだろうか。考えれば考えるほど新たな疑問が次々と出てき、深く考えさせられた。サンチャゴは、海という大きな自然の存在に対して闘いを挑んだ。そのサンチャゴの存在はちっぽけなものであり、人間が命をかけて闘い、何も残らないという結果に終わった。しかし、サンチャゴは周りの者から何と言われようと自分の信念を貫き通し、少年という大切な存在を得たことがサンチャゴにとって最大の幸福であったと思う。サンチャゴが全力で闘った事実は、そこに何ものにも替えられない勝

利の充実感を残したと感じた。サンチャゴの全身全霊をかけて堂々とした姿は、一人の人間として美しかった。

孤独の中で自然に立ち向かうサンチャゴのその姿勢は、彼のそれまでの生き方が与えた自信なんだろうなと感じた。これまで何度も何度もそれを証してみせてきたのだが、そんなことはどうでもよく、サンチャゴは今ふたたびそれを証明しようとしていると感じた。何度でもいい、機会はそのたびごとに新しく、昔の手柄など、老人はもはや考えていないはずだ。僕は、このようなサンチャゴの気持ちや行動などにとっても興味を引かれた。

この本を読んで本当の海の怖さを知った。大切な物を失う気持ち、そして命の大切さを学んだ。しかしそれだけではない。この『老人と海』は、表面的にはただ一人の漁師がカジキマグロを釣り、そして鮫に食べられてしまったストーリーだが、そこにはもっと深い意味が込められており、そこには読者に読ませる力がみなぎっていると感じた。それはたぶん、老人が一人の人間として小説の中で闘っているからだと思う。闘っているのが登場人物としてでなく、一人の人間として闘っているからなのだ。一人の人間の目から、海や生き方、闘いが描かれているから、この小説にこれほど引きつけられたのだらうと思う。

『ノルウェイの森』を読んで

1年 物質工学科 大浦久美

「この不思議な感覚はなんだろう」。これが、『ノルウェイの森』を読み終わっていちばん最初に思ったことです。物語の内容が理解できずにモヤモヤしているわけでもなく、だからといって物語を完全に理解し、スッキリした気分だったわけでもありませんでした。

『ノルウェイの森』を読んだ感想は、と聞かれると、他の物語のようにここがよかったというところはなく、物語全体の印象が迫ってくるような感じでした。だからこの物語は何度でも読み返したくなり、何回読んでも飽きることはありませんでした。そして何度も読むことで物語を理解し、入り込むことができました。

この物語は、学生運動の時代を背景として、主人公「僕」と友人の恋人直子、僕の大学の友人である緑を軸に、思春期の葛藤や人間模様、恋愛、喪失感などが、「僕」の視点から描かれています。

私が読んだこの『ノルウェイの森』は「生」と「死」の二つの世界にきれいにわかれていたように思います。主人公である「僕」ともっとも重要な関係にある二人の女性それぞれの世界で、一つは直子を取りまく「死」の世界。そしてもう一つは緑が持つ「生」の世界です。姉や恋人のキズキを自殺で亡くし、自分の気持ちの整理がうまくできない直子のまわりには、必ず「死」がとりまいていました。私から見た直子は、生きていくなかでその先に死があるのではなく、死の存在のなかで生き、死に向かって生きていたように思います。母親も父親も脳腫瘍で失い、哀しい境遇のなかで生きてきた緑は、明るく活力にあふれ、「生」のちからを持っているように感じました。死をおそれて生きていくのではなく、すべてを「生」のなかでとらえ、生きていく力に変えていたように見えました。そして、

「僕」は直子と同じように「死」に取り囲まれている存在だったように思います。直子を愛し、理解しようとするその考えや行動が「死」に浸食されていくようでした。でも、だからといって僕が、死に向かって生きていたというわけではありません。直子を愛するあまりに、直子を取りまく「死」の世界の中に入ってしまったんだと思います。そこから「僕」を救い出したのは、「生」のちからを持つ緑でした。もし緑がいなかったら、と考えると、物語の結末はすごく違う方向に進んでいたような気がします。この物語では、どんな登場人物であろうと、どんな小さな出来事であろうと、少しでも変わってしまっていたら、すでに『ノルウェイの森』ではなくなっていると思います。

私が『ノルウェイの森』を何度か読んで気付いたのは、この物語のなかでは「死ぬ」という行為があまりにも簡潔に描かれているということです。誰かの死についての描写のほとんどがたった一文で終わっています。たったひとりの友人であるキズキの死、先輩の恋人であるハツミさんの死、愛する人である直子の死までもが、一文におさめられていました。最初に読んだ時は、なぜ死という重大なことをこんなに簡単に終わらせてしまうんだらう、とっていました。でも何度か読むうちに、それは違ってたと気付きました。それは、物語にでてきた「生は、死の対極としてではなく、その一部として存在している。死を傍らに、それでも生きていかなければならない。」という文章で気付くことができました。死は特別なことではなく、常に生のなかであり特別ななかではなかったのです。ただ、死が生の最後にあるだけのことです。死をただの「死」ではなく「生」の一部ととらえるだけで、考え

方は全く違うものになりました。

『ノルウェイの森』は本当に多くの事を考えさせられる物語でした。もっとたくさん読んで、この物語の本当の意味を理解し、深くまで入り込んでみたいです。そして、生きることがつらくなったときや人生に迷ったとき、深く愛すること、強く生きることってなんだろうと疑問に思ったとき、この本を手にとり、読もうと思います。



『苦海浄土 わが水俣病』を読んで

1年 物質工学科 水間 峻介

平成24年7月31日に、水俣病の救済申請が締め切られるため、過去最大規模の1400人に八代海沿岸の住民健康調査が行われ、その8割に水俣病症状があることが確認された。6月11日に、水俣病患者に寄り添い続けた原田正純医師が亡くなられたばかりのことだ。原田医師は生前この本を読まれ、「詩的で優しい文体で、怒りを書くことができるなんて驚きだった。」と話されたそう。

石牟礼道子氏は、水俣病患者のことを信念を持って伝えたかった。作家生命をかけて親身になって向き合うことで患者たちは心を開き、我が身に起こっている様々な症状（言語障害、聴覚・味覚・触覚・痛覚障害、失調歩行、四肢硬直、全身けいれん、狂躁状態になるような精神障害）を彼女に伝えた。語り口調で書かれた坂上ゆきさんの話は衝撃的だった。自分で獲った魚を食べただけの一漁民の彼女が、数年で体の自由を奪われ様々な感覚を失い、差別や偏見を受けた。病院での入院は打つ手もなく、研究のための学用患者として扱われ、悩み苦しみ続けいつも死に脅え、自分の死後の解剖の恐怖にもさらされていた。

水俣病というどこにも救いのない状況で、自分なら耐えて生きていられたらどうか。

昭和28年8月に第1号患者が出る。国は熊大医学部を中心とする文科省科学研究所水俣病総合研究班を4年後によく設置、その後の昭和34年7月に水俣湾で獲れる魚介類に含まれるある種の有機水銀が原因かと発表した。

新日本窒素付属病院院長細川一博士は保健所と一緒に地域住民の症状を調査し、昭和31年8月には、厚生省へ報告している。これは、原因を追求させまいとする浅はかで汚い態度の新日本窒素肥料水俣工場や国の対応の遅さとは対照的である。自分がその立場なら、細川博士のように自分の会社の罪を追求すべく調査ができただろうか。

今僕は、高専で物質工学を学んでいる。将来、科学に携わる仕事に就くならば、行動に誠意を持ち、経済的な価値だけでなく、人々の命を最優先する義務や責任がある。

新日本窒素水俣工場と水俣病患者互助会とが昭和34年12月末に取りかわした「見舞金」契約書では、水俣病患者の子供のいのち年間3万円、大人のいのち年間10万円、死者のいのち30万円、葬祭料2万円。「乙（患者互助会）は将来、水俣病が甲（工場）の工場排水に起因することがわかっても、新たな補償要求は一切行わないものとする」とある。水俣病患者の方達の命が契約書によって値段をつけられたということだ。このようなことが許されて良いのだろうか。その当時の会社の社長の命はいくらだということか。僕の命はいくらなのだろうか。

昭和43年9月26日、厚生省は、新日本窒素肥料水俣工場のアセトアルデヒド酢酸設備内で生成されたメチル水銀化合物が水俣病の原因であると、初めて企業責任を打ち出した。死者42人、患者69人に達し、すでに第1号患者の発病から15年が経過していた。その年の10月から始まった補償交渉に対し、チッソ側はゼロ回答。患者たちは「銭は一銭もいらん。そのかわり、会社のえらか衆の、上から順々に、水銀母液ば飲んでもらおう。上から順々に42人死んでもらう。奥さんがたにも飲んでもらおう。胎児性の生まれるように。そのあと順々に69人、水俣病になってもらおう。あと100人ぐらい潜在患者になってもらおう。それでよか。」心の叫びだ。

この本を読んで科学が生活を良くする際に、公害が起きた事、国や会社の対応が間違った事を含め水俣病の真実と患者の皆さんの深い辛さと悲しみが今も続いていることを知った。今後、科学の力が誰一人傷つけずに発展していくと信じ物質工学を学び、石牟礼道子さんのように誠意と熱意を持って生きていきたい。

生と死～『ノルウェイの森』を読んで

1年 建築学科 向江明希

この物語は、主人公のワタナベ、自殺した親友のキズキ、その彼女の直子、同級生の緑の恋愛小説だ。主人公のワタナベは、キズキが自殺したことで心に深い傷を負っている直子を思い続けるが、結局、直子もキズキを追うように自殺する。

この作品は、ワタナベの18年前の回想で読む者へ直接話しかけるような文体をとっているから、私はワタナベの気持ちに入り込んで読むことができた。読み終えてみて、正直、高校生の私にはとても難しく重いものだった。なぜなら、この本は、「生と死」ということをテーマにして書かれてあると思うからだ。

「二人が向き合ってお互いの気持ちを確かめ合うには、僕の存在が完全にこの世からなくならなければならぬ。」

私は、このような考え方で命を絶ったと思うキズキの死は納得できない。しかし、なぜか直子の死は少しだけ理解できた気がした。よく考えてみたら、それは私の中学校生活での経験があるからだと思う。

私は、中学生のとき、部活内の雰囲気にも馴染めず、小学生のころから続けてきて大好きなバスケットボールをすることが私にとってストレスになったことがあった。我慢できなくなって、私はバスケットボール部を辞めてしまった。辞めたら辞めたで後悔して、また悩んだ。そんな私を心配した担任の先生が、生徒会としての活動を勧めてくれた。それが私にとって、逃げて逃げて行き着いた場所だった。生徒会活動はとても楽しくて、バスケットボールを辞めたことに対する後悔なんて、どこかに行ってしまう。

私と直子は悩み続けて溜め込んでしまうところがとても似ていると思う。私が逃げていたら、いい方向に行き着いたように、直子にとっては「逃げる＝死」だったのだと思う。直子は死ぬことでしか幸せになれない運命で、直子の死はある意味、寿命だったのだと思う。

死ぬことが良いことだとは思わない。しかし、逃げることは悪いことではないと思う。今まで自分の100パーセントでダッシュして来た人は、途中でつまづいて転んだら、すぐに立ち上がって、またダッシュするのではなく、一度足を止めて休憩をしてみたり、ゆっくり周りの風景を眺めながら考え事をするのも悪くないと思う。

「多くの僕の知り合いがそうしたように、人生のある段階が来ると、ふと思い付いたみたいに自らの生命

を絶った。」

なぜ、ワタナベが死を選ばなかったのかということについても考えてみた。それは、直子と違い自分の境遇を理解していたことはあると思うが、緑の存在が大きかったのだと思う。ワタナベ、キズキ、直子、緑の4人の中で唯一、無理矢理でも人と人との間に入り込み、運命を変えようと一生懸命になってくれる緑がいたから、ワタナベは死を選ばなかったのだと思う。そして、緑のようになれないからワタナベは直子を救えなかったのだと思う。

この作品は世界が真っ二つに割れるんじゃないかと思った。直子の世界と、緑の世界。これはたぶん、直子を取りまく「死」の世界と、緑が持つ「生」の世界ではないかと思う。死の世界にいたワタナベは緑の生の世界にいたことを選んだのだと思う。

私は普通の人と違い、悩み続け、最後は死を選んだ直子にシンパシーを感じ、直子と自分を重ね合わせてこの本を読んだ。私は自分の理想に向けていくら努力を重ねても、かえって自分自身が壊れていくばかりで、それが自分でもわかると余計に混乱してしまう直子の気持ちが痛いほど分かる気がする。

これだけ、直子の気持ちを理解できていると思う私でも、もし私がワタナベの立場だったとしても、直子を死の世界から救いさせたという自信はない。

ただ、直子が自殺する前に、もし二人で話し合える機会があったとしたら、もう少し力を抜いて、完璧じゃなくてもいいんじゃないのかと伝えたいと思う。



『ころ』を読んで

僕が『ころ』を初めて読んだのは中学3年生のときである。塾で読書感想文の課題があり、その時指定されたのがこの本だった。その頃の僕はこの本の内容をほとんど理解できなかった。そこで今回もう1度読んでみることにしたのだ。

今回も前回も真っ先に疑問に思ったのは、先生はなぜ自殺したのかである。以前は、先生はKが自分のせいで自殺したと思いその罪悪感で自殺したと思った。しかし、今回は自殺する以前に先生の「心」の中になにかの矛盾、葛藤があったのではないかと考えた。そして、本を読んでいるうちにそれはあった。先生は叔父に財産をだまし取られた過去があった。それをひどく憎んだ先生も好きな女性をとるために友人であるKをだましてしまった。そのことで先生は叔父と同類なのだと思い、そのことに耐えきれなくなり自殺したのではないかと考えた。

次に、Kの自殺の原因について考えた。以前読んだときは好きな女性を先生にとられた形になったのが原因だと思った。今になって考えてみれば三角関係なんてよくあることではないのか、ほかに何か理由があったのではないのかという考えに至った。新たに感じた原因はKの遺書にあった。Kは先生とお嬢さんが婚約したことを知った時、Kは先生にお嬢さんの事が好きだと打ち明けて悩んでいた事を思い出したのではないのか。そしてKはいままでの精進の日々を思い出し、「精神的に向上心がないのは馬鹿だ」とまでいった自分自身を否定し、自殺に至ったのではないかと考えた。「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」これは先生が以前

『変身』を読んで

私は、この『変身』という作品がとても好きだ。主人公が夢から覚めると1匹の巨大な毒虫になっているという突拍子もない話というのは、聞いたことはあるという人が多いだろう。そのくらいこの話の設定は現実味がなく、印象に残る物だと言える。しかし、読み進めていけばいくほどに、この話で使われている表現は設定からは考えられないほどに現実味を帯びていると感じるのだ。

「コミュニケーション」という言葉を辞書で引いて見ると、「社会生活を営む人間の間に行われる知覚、感情、思考の伝達」と出た。では、コミュニケートす

2年 機械工学科 瀬之口 亮 太

Kに言われた言葉であり、先生がKに言い返す言葉であるがそのことはさておき僕は言葉自体に関心をもった。なぜなら、これに似た言葉をよく耳にするからである。僕は陸上競技部に所属している。そこでよく言われるのは「向上心がないとパフォーマンスが下がることはあっても上がることは絶対にない。常にこうなりたい自分を想像してこそ強くなる。」である。僕もそう思った。しかもこれが大正3年、約百年前に書かれていた事に驚いた。本の中では嫌みのような使い方をしているが、昔の言葉が現代で生きているというのは単純にすごいと思った。

次に、自殺という事について僕が感じたことである。以前の僕は、自殺はいけないことではあるけれど色々な理由があるだろうし、仕方がない事なのだろうと思っていた。しかし、『ころ』を読み変わった。今では、自殺は罪だと感じる。なぜなら自殺は周りの残された者たちをも不幸にするからである。Kの自殺で先生は罪悪感を残した。そして、先生の自殺は奥さんや「私」に罪悪感を残すであろう。残された者の事を考えるとやはり倫理的には正当化できない、自分勝手な行為だという気がする。

最後に、この本についてである。僕はこの本を中学3年生のときに読んだが正直理解するのは難しいと思う。高校2年生の今ですらほんのわずかだけしか理解できないのだから。しかし、この本はぜひ読んでほしい1冊であるといえる。なぜなら、生とは何か、死とは何かを明治・大正時代の文豪夏目漱石が書いたのだから。

2年 電気情報工学科 釘 崎 凌

ることがまるで初めから無かったかのようにできなくなってしまったとしたら、あなたならどうするだろうか。自分という存在が他人という存在と知覚、感情、思考を伝達することはとても大切なことだろう。かくいう私は、このようなことは得意ではない。私がもし、このような状況に立たされてしまったとしたら、私は、というよりは、私には、どうすることもできないだろう。それほどまでに、一切のコミュニケーションが断たれるというのは、辛く孤独で私の軟弱な心などではひとたまりもないだろう。しかし、それは唐突に主人公の身に降り掛かるのだから救いようがない。

また、私がこの作品を好きな理由の1つとして、ハッピーエンドではない点があげられる。主人公がひどいめにあう物語というのは、最初は、どんなにひどいめにあったとしても、最後は、主人公は何らかの形で救われる描写があり、その物語が終わる。ということが多いという風に自分の中では思っていた。しかし、この作品を読んで、私のその認識は、大きく変わる事となったのだ。この作品を読んだ当時、私はこんなにもかわいそうな主人公がいるのだろうか、いやそんなはずはないと思い、何度も読みかえたことを覚えている。だが、主人公が救われる描写はなく、むしろこの作品の最後では、主人公の死後、主人公はごみとして捨てられてしまい、主人公の家族は悪い夢から覚めたかのように、何ヶ月かぶりにいそいそと電車に乗って、春の郊外へピクニックへとでかけてしまうのだ。何もせず、主人公はただ毒虫になっただけというのではなく、毒虫になる前は、精一杯働き、家族を養っ

ていたのだが、このような結末を考えると、人生とは何か、自由とは何であるかを考えさせられる。

また、毒虫になってしまったことを不治の病と考え、置きかえてみると、この作品のようなことが、現実にも起こりうるものであると感じる。不治の病と置きかえてみるといったが、それだけではなく、重度の障害や、入社拒否、登校拒否も同じように考えることができるであろう。

何の変哲もない毎日の生活を送っている自分にも、毒虫に変身してしまうようなことはないにしても、この平凡な毎日を一新してしまうぐらいのことはいつ起きてもおかしくはないだろう。しかし平凡な毎日の中で怠惰に生きている自分の姿を見ると人間らしいなと思うと同時に、情け無いと感じる。また、朝目が覚めて、今日も同じような一日が始まり溜息をつきたくもなるが、そんな思考の片隅で、毒虫になっていなくてよかったとほっと安堵する自分がそこにいるのだ。

『人間失格』を読んで

この物語は、語り手である小説家の「私」が幼少時代・学生時代・奇怪な写真の三葉の写真を見比べるところからはじまります。そして、手記では「ことし、二十七」になる男、葉蔵が自分の人生を語っています。また、あとがきでは、手記を書き綴じた狂人の、読後の「私」の感想が書かれています。

この物語を読んで私は、葉蔵が人間らしく生きるために何が欠けていたのだろうか。なぜこのような人生を歩んだのだろうか。と、いくつかの疑問が浮かびました。

彼の家庭は裕福であったし、たくさんの兄や姉にもかこまれていたにもかかわらず、幼いころから何に対しても臆病で、人間に対して恐怖心を抱いていました。しかもそれは、他人に対してだけでなく、家族に対しても同じでした。私にとって家族は、生きてゆく中で一番近く、そして、心の許せる大切な存在です。ですが、この物語の彼は、身近な存在だからこそ最も恐れていたのです。なぜ、家族に対してここまで恐れなければならなかったのだろうか。それは、物語が進むにつれて葉蔵の父が1つの原因なのではないかと彼は思うようになりました。彼の父はとても忙しい人で、ほとんど家におらず、そして、とても厳しい人でした。だから彼は、父からの愛情というものをもらっていないと感じていたのではないかと思います。だからと言って父が彼に対して愛情がなかったとは思いませんが、彼

2年 物質工学科 尾 曲 華 綺

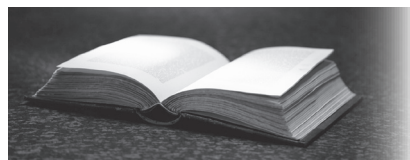
は、愛というものに人一倍敏感だったのかもしれない。そのため、彼には人一倍の愛情表現が必要だったのだろうと思います。もし、彼が満足するくらいの愛情をもらっていたら、違った人生を送っていたのだろうと思いました。

葉蔵は裕福な家庭で育ち、家族と一緒に暮らしていて、とても幸せそうな暮らしをしていました。ですが実際は、彼の心は孤独で押し潰されそうになっていました。そこで自分をお道化して周りの皆と打ち解けようとしていました。このように、衣食住がいくら満ち足りていたとしても幸せとは限らないのです。自分のことを理解してくれる人が1人だけでもいてくれることで安心します。そして、何より大事なのが、やはり「愛情」なのではないのでしょうか。

この物語では、葉蔵という他人に自分の心を見せない人物が極端に書かれています。おそらくこれは、誰にでも言えることなのではないでしょうか。本当の自分を他人に見られることで嫌われてしまうのではないかと不安になるはずですが、でも、どこかで自分の本当の姿をみんなに知ってもらいたいと思っているのだと思います。

最後に葉蔵は、「人間として失格」と言っています。葉蔵には、愛と欲求を制御する力が足りていなかったのだと思います。もともと、その2つを制御するのはとても難しいことなのではないのでしょうか。そんな中、

一生懸命愛を与えよう、そして、生きようとしている葉蔵の姿から、私自身も人間らしく、そして自分らしく生きてゆきたいと思いました。



『人間失格』を読んで

この「人間失格」という作品は、「人間」を「失格」とするというタイトルから醸し出されるイメージの重たさ、そしてそこに入水自殺によりこの世を去った作者、太宰治のイメージとの共振が加わってか、陰惨で深刻な作品であるという先入観が広く流布しているであろう。私も最初は、そのような先入観がなかったとは言えない。しかし、読み進めるうちに、大庭葉蔵に共感したことがあった。

葉蔵は自分のことを、「人間に対して、いつも恐怖に震いおののき、また、人間としての自分の言動に、みじんも自信を持たず、そうして自分ひとりの懊悩は胸の中の小箱に秘め、その憂鬱、ナアヴァスをひたかくしに隠して、ひたすら無邪気の楽天性を装い、自分はお道化たお変人として、しだいに完成されてゆきました。」と表現している。私は、ここで葉蔵が自分は道化を演じているという所に共感した。私は、人間は誰もが、多かれ少なかれ道化を演じていると思う。なぜなら、自分自身の本心をすべて正直にさらけ出して生きている人間などいないと思うからだ。人間誰も建前というものがある。私自身、毎日他人の目を意識しながら生きている。人に良く思われたいから自分のマイナスな部分を隠したり、その場の空気を壊さぬよう、本心とは正反対の意見に同調したり、この世界にはあたりまえのように道化があふれている。

さらに「人間失格」を読み進めるにつれて、葉蔵への共感が尊敬へと変わった。葉蔵は、道化を演じるこ

2年 建築学科 高橋弘臣

とで逃避的に生きることを許さなかった。真の自分を偽って習慣化した日常を生きる自分を責めたのだ。そんな葉蔵を私は尊敬した。しかし、自分を責め続けるには、相当の苦しみが伴ったのだろう。だから女や酒、薬に溺れ、「狂人」へと変豹していったに違いない。そう考えると、これも一人の人間の生き方の形なのかもしれない。

私は、「人間失格」に出会うまで道化の仮面を被り、お互いに傷つけ合うことを避け、平凡な日常を無事に過ごしている自分に対し、少しの罪悪感さえ感じていなかった。そして「人間失格」に出会った今、自分の本心について考えてみた。しかし、道化を演じることでその場をとりつくろい、他人との人間関係を適当にごまかすことに慣れてしまっていた私は、考えれば考えるほど分からなくなってしまった。だが、そのような面を含めたものが本当の自分だと思う。

現代は、「道化」におおわれた虚構の世界だ。日常の用件は携帯やパソコンで済ませ、人と人との関わりは薄れ、自分の本心は隠し、感情を素直に表現することもなく毎日が過ぎていく。私は、孤立化した社会の中で本当の自分と向き合うことのできない人間がますます増えていくと思う。そんな時代だからこそ人間の本質を教えてくれた「人間失格」に、太宰治に感謝したい。そしてそれを出来ることなら（もう既に不可能なことだが）彼に直接、面と向かって言いたい。

『小さき者へ』を読んで

3年 物質工学科 松川慶太郎

父親から自分の将来に対する応援の手紙をもらったらどう思うでしょうか。子供達の父親の「私」は、子供達が生まれてからの出来事、自分の気持ちを手紙に書きつづっていました。子供達はこの手紙を読んだ時、あの時厳しかったのはこういうことが理由だったのかと分かり、父親の自分達に対する思いを知り、そこに愛を感じずにはいられないだろうと思います。

手紙に想いを書いたほうが口で想いを伝えるよりも

素直に全てを相手に伝えることができると思います。

私は一度だけ、親に手紙に想いを書いたことがあります。それは、日頃の感謝の気持ちを書いたものでした。日頃から親に何かしてもらったときは感謝の言葉を口にしなかったことはありませんでした。しかし、言葉にした時よりも感謝の気持ちを書いた手紙を渡した時のほうが、親は喜んでくれました。手紙にしたほうが、自分の気持ちを素直に相手に伝えることができ

るのでしょう。この物語の「私」も子供達への想いを手紙にしています。「私」は不器用ながらも手紙なら伝わるだろうと考え、書きつづったのだと思いました。

手紙の中に「残虐なことをしないではいられなかった」という言葉がありました。「私」には次々と子供ができ、3人の子供の親となりました。その時の「私」はまだ若く、子供をどう育てていいか分からずイライラしていたのだらうと思います。そして、そのイライラはどうしたらいいか分からないイライラだけでなく、今まで時間を割いてやってきたことが、子供達に時間を取られてしまい、できなくなることに對してのイライラもあったはずです。そのイライラのせいで子供達に残虐なことをしたり、子供達の母上、つまり「私」の妻に当たってしまったのだらうと思います。

私がこのように思ったのは、私もまたイライラのせいで物や人に当たってしまったことがあるからです。それは宿題が終わらないからや、自分の思い通りならないからなどといったしょうもないことでした。それなのにその度に物に当たり、そして親や兄弟に迷惑をかけていました。後悔もしました。このイライラは「私」

に比べると小さなものかもしれませんが、イライラで物、人に当たってしまうというのはよく分かります。自分もそうでしたから。だから子供達に贈る手紙に、分かってもらいたくて「残虐なことをしないではいられなかった」と書いたのだらうと思いました。

私は、自分の父のことを考えてみました。父は私に、あれをやれ、これをやれ、それはやるななどいつも厳しくします。それはどうしてのだらうと考えました。父は「私」に似ていると思いました。父は、感謝の気持ちはあるのに口に出せなかったり、良いことをしても悪いようにとられたり、「私」と同じように不器用な人です。私は、父が厳しくしているのは私の為を想ってのことではないのだらうかと思いました。

この本は父親の「私」が子供達への愛で書かれた手紙でした。この「私」と私の父を重ねてみると、父は私を愛してくれているのだらうと思えるようになりました。そして将来私が親になった時、普段は素直に伝えられない子供への愛を、「私」のように手紙に書きつづりたいと思います。

校内読書体験記コンクール入賞者（入選）

『上昇思考』を読んで……………	機械工学科	第3学年	山下 智也
人生の幸福……………	電気情報工学科	第3学年	金丸 鈴美
『もの食う人びと』を読んで……………	建築学科	第3学年	梅木 春菜

校内読書体験記コンクール入賞作品

『上昇思考』を読んで

3年 機械工学科 山下 智也

「暇あればサッカー」これが今の僕の生活を築きあげている言葉といっても過言ではない。実際にサッカーをしている訳ではないが、サッカーに対する情熱と知識は、数少ない僕の誇れる自慢だ。

近年、サッカーの本場である欧州のリーグで、日本人選手を見かける事に違和感を感じなくなったのは、僕だけだらうか。欧州のリーグは、フィジカル面、メンタル面、もちろんテクニックにおいても他の地域のリーグとは、頭2つ分ぐらい抜けている。そんな、サッカー界のトップ集団で、日本人選手は大活躍している。その一人が、今回僕が読んだ本「上昇思考」の著者、長友佑都である。長友選手は、サッカー強豪国イ

タリアのセリエA（リーグ名）で活躍している選手だ。所属チームは、毎年リーグの優勝争いをしている強豪インテルに所属している。

そんなトップのトップでプレイしている長友選手は、どのような心境で毎日を過ごしているのか。その疑問を、この1冊で分かったとまでは言えないが、知ることはできた。

「上昇思考」この文字通り、最初僕はモチベーションの高め方を綴った本だと思っていた。しかしこの本には、直接的にそのような事を書いた文章はほんの少ししかなかった。この本を読むにつれて、僕は主に2つの分野について書かれていると気づいた。

1つは、感謝についてだった。僕が知る限りトップのサッカー選手は、自画自賛をする選手がほとんどで、人前で「誰かのおかげ」なんて言葉を口にする選手は、滅多にいない。

長友選手は、この本で中学・高校の時のサッカー部の顧問、以前所属していたチームの仲間や監督など多くの人に対して感謝の言葉を述べている。僕はその中でも、家族に対しての感謝に強く胸を打たれた。

長友選手は、幼い頃に両親が離婚し母親と姉、弟の4人暮らしで日々生活していた。長友家は、全員私立大学を卒業したらしく、3人合わせて学費は三千万円以上かかったと記されている。当時、長友選手は高校から大学に進学する際に、お金の事もありサッカーで進学する事をあきらめかけたと述べている。サッカーで生活していく事を、確約されていない状況で、本当にサッカーを選んで大丈夫なのかどうか迷った長友選手の心境は、到底僕みたいな素人が分かるには無理がある。しかし僕にも中学3年の頃、就職先が限定されてしまう専門校に行くか、就職の事をゆっくり考えながら進学する進学校に行くか迷ってしまった時期が訪れた。そういう状況の中で心の助けとなるのが、間接的に支える事ができる親の存在だ。どちらの道を進むかはやはり、自分自身で決めなくてはならない。しかし、経済的な理由も含めて安心感が生まれてこそ、重要な判断が下せる事を僕は理解する事ができた。

人生の幸福

私は今年で18歳を迎えた。普通高校の3年生である友人達は就職や進学に向けて忙しい日々を送っていると聞く。私達高専3年生にとってはまだ少し先の話であるが、そのような事は早めに意識しておいた方が良くと言われた事がある。そこでふと思った事がある。進学する大学や就職先について調べるという事も大切だろう。しかし、これから先の人生についてはどう考え生きていけばいいのだろうか。こうして、私は「14歳の君へ」という本を手に取り考える事にした。この本は私が中学生の頃から何度も読んでいた若者向けの哲学の本で、「どう考えどう生きるか」という副題がある。今回、特に読み込んだ章は「幸福」と「お金」、そして「人生」だ。

『将来の夢』と『人生の目標』は似ているが別のものだ。私の『将来の夢』はかなり曖昧で、未来の事など全く見当がつかないからか、未来像が思いつかない。しかし、『人生の目標』となると、今まで通り幸せに

長友選手は、この苦渋の決断をする時母親から次のような言葉を述べられていた。「お金のことなんか、どうにでもなるから、子供が心配することじゃない。」これほど、子供にとって安心できる言葉はないくらいの言葉だと僕は思う。

長友選手は、支えてくれる家族のおかげで「特別な高校生活」を乗り越えることができたと記している。

次に2つ目は、コミュニケーションについてだ。生活の拠点を日本から異国に変える時、絶対的に必要なのが言語になる。特にサッカー選手の場合は、生活だけでなくピッチ上にも影響してくる。パスがもらえないのも例外ではない。

長友選手は、コミュニケーションをとる際に少ない言葉を覚えて思いっきりバカになるらしい。そうすると、相手に言語ではなく想いで溶け込みたい気持ちを分かってもらえると述べている。少なくとも、この方法が一番良いとは限らない。しかし、サッカーというすぐに結果を求められる世界では、僕は最善の策だと思える。

この本を読んで知ることができたが、どの仕事をするにしても周りの支えなしでは、生きていくことはできない。直接、感謝の意を告げることは少し照れくさいが、長友選手のように、本いわる文字で伝えることも一つの手なのかもしれない。

3年 電気情報工学科 金丸 鈴美

生きていきたいと答える事ができる。恐らく、多くの人が幸せになりたいと思って今を生きているだろう。その事を著者はこう述べている。どんな形であれ幸福こそが全ての人の『人生の目標』なのだと。では、そもそも幸福とは一体何なのか。世の中にはお金を儲ける事や人並みもしくはそれ以上の生活を送る事、欲しい物をたくさん買える事が幸せだと言う人もいる。極端に言うと、お金こそが幸福だという考えだ。かなり個人的な意見ではあるが、正直、私はこういった考えを良いとは思えない。もし仮にお金だけで幸福か不幸かを決めるとしたら、きっと人は常に不幸だと感じる事になるだろう。お金が無ければ不幸だが、お金があったとしてももっとお金がなければ自分はまだまだ不幸だと感じてしまうし、お金が無くなってしまわないか常に心配しなければならないからだ。そう考えるとどうしても幸福だとは考えにくいのだ。それでは、私にとっての幸福とは何か。確かに私にも欲しい物が手

に入れば嬉しく思う時もあるし、幸せだと感じる時もある。だが、欲しい物がお金だということはほとんどないのだ。例えばお小遣いを貰った時、その時点で買いたい物があれば喜んで受け取るが、そうでない時はお礼を言って財布に入れるだけだ。その上、私は物欲がほとんどない為、「いつか大変な時に使おう」と机の中に入れておくことが多いのだ。そもそも私が幸せだと感じる時は物を貰った時ではなく、何気ない日常生活時の方が多いいのだ。家族でくつろぐ時、ご飯を食べながらいろいろな話をする時などに幸せだと感じる。これが私にとっての幸福である。お金は幸福に値しないという考えだ。

著者がいう幸福とは心のありようだそうだ。つま

『もの食う人びと』を読んで

私は、食べる事が大好きです。好き嫌いもそれほどありません。美味しいものを食べている時は、本当に幸せを感じます。そんな事もあってか、私はこの本の題名に引き寄せられました。どういった本なんだろう、どういう事が書かれてあるのかな、大好きな食べ物の事について書いてあるなら読んでみようかな、そう思ってこの本にしようと決めました。

実際に読んでみて、一言で言うなら、「衝撃」の2文字です。この本は、著者の辺見庸氏が世界各地を旅して、出会った人と、その人々が何を食べていたか、というのを取材し、まとめた本です。しかし、ただのグルメ本ではありません。ただ、「あ、美味しいな。」と感じる「食」ではなく、「生きる」ための「食」について書かれた本でした。私には縁がない「食」です。実際、著者が食べたものは、捨てられた残飯、囚人食、難民向け援助食料、修道院の精進料理、放射能に汚染された食品、ロシア海軍の給食、猫用の缶詰、国連平和維持軍の各国携帯食など、ほとんど美味しそうな食べ物は登場しません。著者は、こうして多くの国を訪れ、「生きる」ための「食」を通して、現代世界の現実を伝えたかったんだと考えます。

その中の1つに、著者がバングラデシュのダッカの駅前広場の屋台で、知らず知らずに残飯を口にしようとした時がありました。骨付きカルビを食べようとした瞬間、現地の人から止められ、肉に他人の菌型があることに気付き、思わず皿を放り出してしまいます。その皿を奪い取り、残った残飯の骨付き肉にわき目も振らず噛み付く少年。この光景を想像して、私は胸が熱くなりました。著者がなぜ皿を放り出したのか、そ

り、職業や生活、財産などといった外から見て分かる形ではなく、幸せと感じる心の事だ。しかし、一般的にはそれとは逆の事を幸福だと思っている人が多いそう。だとしたら、私は著者の考えに近いと同時に周りとは若干異なった考え方をしているという事になるのではないのか。それが良い事なのか、それとも悪い事なのかは分からないが、これだけは言える。人生において幸福だと思った方が何倍も得なのだ。

人生、何が起こるか分からない。それもそのはず、生があれば死もある。生きる事は死ぬ事でもあるからだ。だからこそ幸せな気持ちでしっかりと生き、人生を楽しむべきではないのだろうか。

3年 建築学科 梅木春菜

これは汚かったから。見ず知らずの他人の菌型がついた食べ物に、不快感、嫌悪感を抱いたからです。でもその少年は、そんな事気にもせず飛びつきました。きっと、その少年にとって骨付きカルビはご馳走だったに違いありません。他人の食べかけなんてどうだっていい、自分のご馳走を食べれてラッキーだった、そう思ったかもしれません。これを残飯リサイクルと呼ぶそうですが、飽食である日本ではありえない光景です。自分がどんなにお腹が空いていても、自分がどんなに大好きな食べ物でも、迷いなくゴミ箱に捨てるでしょう。私はこの差にひどく衝撃を受け、心が苦しくなりました。

日本は、食べ残し、残飯排出量が世界一であると言われていています。日本で生産し、日本で消費し、余らせているならまだ良いのかもしれませんが。しかし、日本は食料の約7割を世界から輸入し、その約3分の1にあたる量を廃棄しています。バングラデシュの少年にとって、残飯ですらご馳走になってしまうようなものを、日本は簡単に、いらぬものとして、捨ててしまいます。世界には食べたくても食べられない人が何人いるのでしょうか。私たち日本人の胃袋を満たすために犠牲になっている人は、何人いるのでしょうか。

私は、お腹が空いても、冷蔵庫を開ければ食べ物があります。誰かの食べかけでもなく、清潔で美味しい食べ物を食べる事ができます。それがどんなに幸せな事か、私たちは気付きにくいかもしれません。この本を読んで、「食」に対しての責任感を感じました。普段何言なく食べている、3食のご飯。毎日残さず、感謝して、「いただきます。」

講演会

講演「太陽光や太陽熱を利用する新エネルギー研究最前線」

宮崎大学工学部電子物理工学科 准教授 西岡 賢 祐

図書館では例年、学生の読書に対する啓蒙の一環として、外部講師を招いて講演会を実施しています。去る12月19日(水)、1年生を対象にして、西岡賢祐先生（宮崎大学工学部電子物理工学科准教授）による講演会を開催しました。このたび、西岡先生に当日の講演の梗概を記した玉稿をお寄せいただきましたので、紹介します。



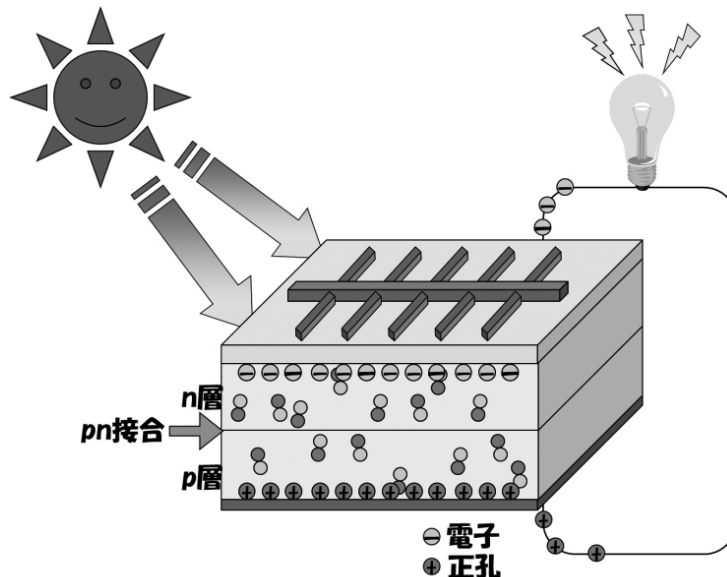
現在の主なエネルギー資源である石油・天然ガス・石炭・ウランには全て埋蔵量に限界があり、近い将来、エネルギー問題として人類が直面しなければならない課題である。そのような中で無尽蔵で環境を破壊しない太陽エネルギーは、新エネルギーとして注目されている。講演では、太陽電池の発電原理、太陽電池の現状、太陽電池の作り方、最先端の太陽電池、宮崎大学エコキャンパスの取り組み、未来の太陽光発電について述べた。

太陽電池のさらなる普及のためには、コストを下げる必要がある、高品質で、かつ、低コストを実現する太陽電池プロセスの開発が進んでいる。

太陽電池の発電原理としては、pn接合を有する半導体に光が照射されると、電子と正孔のペアが発生し、それらがpn接合によって分離されることにより電流が発生する。

現状、pn接合を有するシリコンの太陽電池を作製するために、「塗って焼くだけ」をベースにした低コストプロセスが開発されている。一方、一般的に売られているシリコンの太陽電池に比べ、発電効率が2倍程度ある宇宙用の太陽電池も開発されており、これは、GaAs等の化合物を使用した太陽電池である。

宮崎大学では、各種の太陽電池をキャンパス内に設置し、研究開発に活用するとともに、得られた電気は大学で使用している。未来の太陽光発電の展望としては、やはり、砂漠等、大面積に設置することが重要であり、そのための低コスト・高効率化が急務となっている。宮崎大学においても、太陽エネルギー開発に貢献できるよう、研究者が活発に研究を進めている。



JDream II 講習会の開催

このたび図書館では、JST（独立行政法人科学技術振興機構）イノベーション推進本部情報提供部福岡デスク・インフォアドバイザー のぎ田めぐみ氏を講師としてお招きし、「JDream II 講習会」を開催した。

対象は本科4～5年生と専攻科1～2年生並びに教職員。当日は17名の参加があった。講習内容は、次の5項目に分けて講義と実習で進められた。



1) 科学技術振興機構（JST）について—— JSTは科学技術の振興と発展をサポートするために様々な事業を行っています。

- ①イノベーションを生み出す研究開発システム
⇒ 実用化・技術開発
- ②イノベーションを生み出すための研究基盤整備
⇒ 研究基盤の強化
- ③科学技術情報の流通促進 ⇒ JDream IIによる文献情報の検索

2) 科学技術文献情報とは？

研究開発活動（実験、観測、観察等）の成果として出される情報を科学技術情報といい、文字によって表したものを文献情報といいます。

3) 科学技術文献情報の役割とは？

- ①今から行う研究の成果がすでに発表されていないかどうかを調べる。
- ②新しい研究であるかどうかを調べる。
- ③研究開発活動を行う上で、参考になる情報を収集する。

4) 文献の入手方法は？

★科学技術文献情報はどこで手に入れる？

- ・無料のインターネット検索エンジン（Yahoo）等を使って入手します。
- ・データベースを活用すると、情報を効率よく網羅的に入手できる。

5) JDream II

★データベース／検索モードの選択（シンプルモード・コマンドモード）

★3ステップで簡単検索

- ・ Step 1：検索条件入力
- ・ Step 2：タイトル一覧表示
- ・ Step 3：回答結果の表示

★検索の仕方

①検索フィールドの選択

- ・ データ中のどのフィールドを検索するのか指定する。

②検索語の入力

- ・ 複数の語を入力する場合は、語と語の間にスペースを入れる。
- ・ 語間のスペースが演算子となる。
- ・ ボックス内→ボックス同士の上からの順番で検索される。
- ・ 「追加」で12個まで条件追加可能。

③演算子の選択

- ・ 演算子とは、検索式を作るときの基礎となる考え方。

★検索のコツ

- ・ ある人物の論文を漏れなく探す場合は、日本語表記、アルファベット表記両方検索する必要があります。
- ・ 著者IDも併用しましょう！



5) 実習（パソコンを使って自由に検索を行った）

- ★所属機関名や進路希望先で頻度分析をする
- ★興味のある研究テーマで検索する
- ★新聞で見つけた最新事例の周知知識を得る
- ★過去の研究事例に沿って検索する
- ★興味のある分野を研究している大学は？
- ★興味のある企業の最近の研究状況は？

（文責・有川）

今年度の活動と図書委員会の在り方について

学生図書委員長：浅野 大樹

図書副委員長：宮川 麻有

■今年度の活動について

今年度の活動の大きなモノとしてブックハンティングとテーマ展示の2つが挙げられます。

昨年度は日程の都合等もあり、1・2年と3～5年で分かれてのブックハンティングでしたが、今年度はようやく、全学年そろってのブックハンティングが実現できました。全学年で行くことにより、低学年時にわからない授業の参考書等を高学年に聞きながら選ぶなどの学年間の垣根を越えた選書を行う事が出来、いままで以上に有意義なブックハンティングを行う事が出来ました。

また、今年度は新たな試みとして、図書委員主体によるテーマ展示も行いました。これは、図書委員会で定期的にテーマを決め、それに沿った図書委員オスズメの本を一か所に集めて展示するというものです。

9月～11月に行った第一回は、秋の夜にじっくり読んでもらうため「ミステリー」、12月～2月に行った第二回は、神秘的な「ファンタジー」など、テーマも展示時期を考えたテーマを定めました。

最近始めた事なので、目に見える成果はまだ実感できませんが、似たようなジャンルを集めることで、図書館を利用される方に今まで読んでいた作家以外の作品にも触れてもらいたいと思います。

■今後の図書委員のあり方

各委員会の中でも、図書委員という存在は活動があまり知られておらず、級友に聞いても、活動をあまり知らないのが実態です。そこでこれからは、ブックハンティング以外の目立った行動を行う事で図書委員はこれを行っているんだ！と図書委員以外の方々にもわかってもらえるような活動を行っていきたいと考えます。



ブックハンティング実施される

昨年度からブックハンティングは、全学年生（1年生～5年生）の図書委員で実施することになり、今回は2回に分けずに1回で実施しました。

実施日は12月8日(土)。17名が参加して、宮崎市の蔦屋書店で行いました。蔦屋書店は12月上旬にリニューアルし、1階に小説・文庫本等があり、2階には専門書があります。宮崎市内でも大型の書店で多く本が揃っています。今回、ブックハンティングは2時間に延長しましたが、各クラスの図書委員はみな購入リストを基に熱心に選書していました。



次回の開催にあたっては、今回同様に全学年図書委員を集め、時期を早めにして更に所要時間を4時間にして充実したブックハンティングにしたいと思いました。

ブックハンティングで購入した本の一部を紹介（2012年度）

BOOK HUNTING 2012

書誌情報	著者名	出版社名	請求番号
基礎C言語プログラミング	河野英昭（ほか）	共立出版	007.64 キソC
猫でもわかるC++プログラミング	糸井康孝	ソフトバンククリエイティブ	007.64 クメイ
明解入門Java	林晴比古	ソフトバンククリエイティブ	007.64 ハヤシ
「美女」と「悪女」大全：歴史を変えた！	榎本秋	新人物往来社	280 ビシ
採用基準：地頭より論理的思考力より大切なもの	伊賀泰代	ダイヤモンド社	336.3 イガ
物理学、まだこんなに謎がある	小谷太郎	ベレ出版	420 コタニ
量子の国のアリス：量子力学をめぐる不思議な物語！	Robert Gilmore	オーム社	421.3 Gil
超伝導入門	青木秀夫	裳華房	427.4 アオキ
21世紀の物質科学：最先端がわかる	東京大学物性研究所	培風館	428 21セ
表面科学・触媒科学への展開	川合真紀, 堂免一成	岩波書店	428.4 カワイ
クラゲの光に魅せられて：ノーベル化学賞の原点	下村脩	朝日新聞出版	431.54 シモム
宇宙のはかり方	縣秀彦	グラフィック社	440.4 アガ
利己的な遺伝子	リチャード・ドーキンス	紀伊國屋書店	467.2 Daw
魚は痛みを感じるか？	ヴィクトリア・ブレイスウェイト	紀伊國屋書店	487.51 Bra
iPS細胞がわかる本：グラフィックガイドfrom Young Alive! : 未来をひらく最新生命科学	科学技術振興機構 日本科学未来館	PHP研究所	491.11 カガ
わかりやすい振動工学の基礎	青木繁	日本理工出版会	501.24 アオキ
イラストでわかる建築模型のつくり方	大脇賢次	彰国社	525.1 オオワ
建築プレゼンの掟	高橋正明	彰国社	525.1 タカハ
Dental clinic design=デンタルクリニックデザイン	車田創	商店建築社	526.49 Den
図解飲食店の店舗設計：30業態徹底解剖	竹谷稔宏, 青島邦彰	柴田書店	526.67 タケヤ
新しい住宅デザインの教科書：土地デザインからプランニング・ディテールまで	黒崎敏	エクスナレッジ	527.1 クロサ
基礎から学ぶ機構学	鈴木健司, 森田寿郎	オーム社	531.3 スズ
エンジンのロマン：技術への限りない憧憬と挑戦	鈴木孝	三樹書房	533.4 スズ
純国産ガスタービンの開発：川崎重工が挑んだ産業用ガスタービン事業の軌跡	大槻幸雄	三樹書房	533.46 オオツ
イラストでわかる原発と放射能：これであなたも大丈夫	大木久光	技報堂出版	539.6 オオキ
放射線除染の原理とマニュアル	山田國廣	藤原書店	539.68 タナタ

図書館からのお知らせ

図書館開館予定について

期 間：3月5日(火)から3月29日(金)

開館時間：9時から17時まで

(なお、平成25年度の開館予定は、4月3日(水)開始予定です。)

今年度の夜間開館は、3月1日(金)までです。

次の期間は、平日のみ開館します。

学年末・春季休業中の長期貸出について

貸出開始日：2月20日(水)

返 却 日：4月8日(月)始業式

帯 出 冊 数：7冊

通常10日間の貸出期間を学年末並びに春季休業中は、長期貸出とします。

編/集/後/記

今回の図書館だよりには、本年度をもって退職される樋口先生から玉稿をお寄せいただきました。ご多忙中のところご協力いただきまして、誠に厚くお礼申し上げます。

また、本号には、校内読書感想文・体験記コンクールの入賞作品を掲載しました。入賞作品は1年生～3年生の作品から選ばれた力作揃いで、昨年12月の全校集会で表彰されたものです。ご多忙中、学生の読書感想文をご指導下さいました国語科の先生方に厚くお礼申し上げます。